

# 円覚

令和2年 秋ひがん号

331号



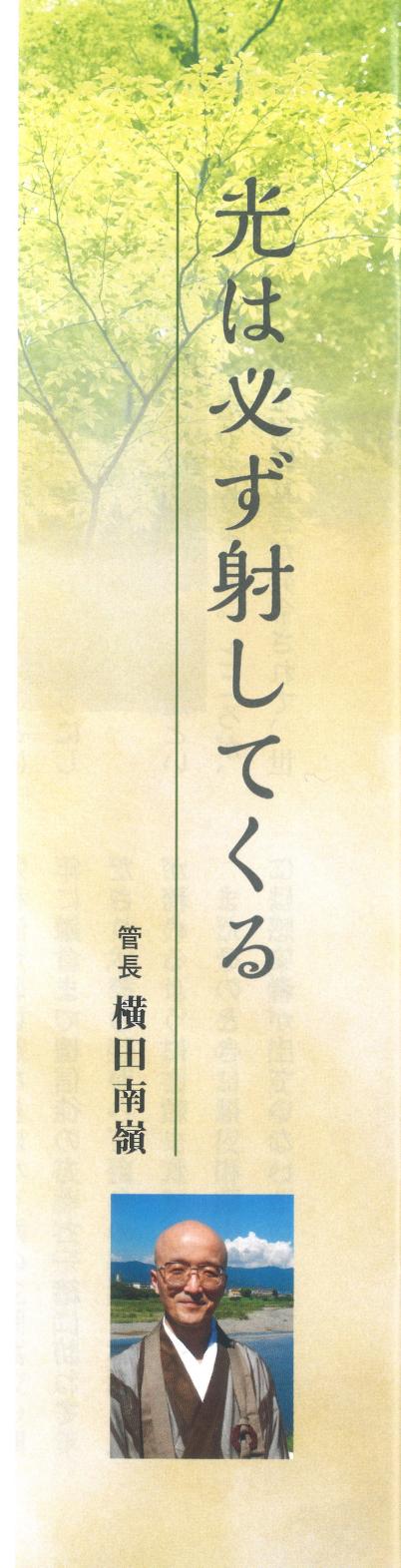
それ故われわれは、常にこの「無常」の大法を心して、いつ何が起ころうと驚かぬように心しなければならぬ。」

「釈尊の説かれた「無常」の真理とは、「この世ではいつ何が起こるか分からぬ」ということです。

森信三先生の言葉に、

というものがあります。『森信三一日一語』にある言葉です。

昨年の暮れあたりから、中国において新しいウイルスが蔓延しつつあるということを耳にしていました。今年に入つても、まだ私などは、余所の国のこととしてしか思っていませんでした。それが、二月に入った頃から、だんだんと他人事ではなくなつてきました。二月の日曜説教や涅槃会はまだどうにか行うことができましたが、その後は難しくなつ



## 円覚331号目次

管長猊下 色紙	表紙II
光は必ず射してくる／横田 南嶺	1
俳句的死に方(四)／長谷川 権	10
中世文学と禪(四)／田中 徳定	18
信心ことはじめ ⑩	26
他人の死を観た時／桜井 竜生	28

表紙・裏表紙写真／平林克己

てきました。第四日曜日の日曜説教は中止にしました。

そうして、さまざまな行事が中止になるようになってきました。そんな時に、二月の末の二十九日に円覚寺の前管長であった足立大進老師がお亡くなりになりました。その頃になると、新型コロナウイルスの問題は、かなり深刻になってきていました。

足立老師の密葬にしても、元来は円覚寺派の和尚様方をお招きするのですが、円覚寺山内の和尚様方のみで行うことにしていました。しかも通夜でも密葬でも、食事を出すことはせずに弁当をお持ち帰りしてもらうようにしました。

ただその頃はまだ、本葬にあたる津送しんそうという儀式を行う予定がありました。ところが、四月に入つて緊急事態宣言が発令されて、世

の中は一変してしまいました。

私は、二月二十一日に坂村真民記念館で講演をしたのを最後に、八月いっぱいまで総ての講演、法話、研修会、坐禅会などはキャンセル、もしくは来年に持ち越しになりました。ぎっしりと詰まっていた私の予定表は、すべて空白になりました。

三月の末に、私のふるさとのお寺の和尚が亡くなり、お葬式を務めできました。私が坐禅の道に進む、一番のご縁を結んでくださった恩師である臨済宗妙心寺派清閑院の後藤牧宗和尚がお亡くなりになつたのでした。一昨年に鎌倉まで檀信徒の方々と一緒に訪ねてくださり、その時からご自身の葬儀の導師を私が務めるようにと頼まれていたのでした。

まだそのときには、和歌山県でも南紀地方には感染者が出ていないというので、飛行機

で行つて帰つてくることができました。

しかし、そのお通夜の席に感染者がいたことが分かり、様相は一変し、五月に予定されていた本葬も近在の寺院のみで済ますことになつてしましました。後藤牧宗和尚は、多年妙心寺派の要職にあり、京都の花園高校の校長も務められた方ですので、大がかりな本葬を執り行うはずだったのです。私も本葬の大導師も頼まれていましたが、伺うことができなくなりました。

加えて、足立老師の本葬もまた、円覚寺派一派を挙げて行つつもりであったのが、内々で済まさざるを得なくなつてしましました。

ここまで大きな影響が出るとは、思いもしなかつたのでした。まさに森信三先生の、「何が起ころか分からぬ」という一言をしみじみ噛みしめたのでした。



二月二十二日 坂村真民記念館にて

新型コロナウイルス感染症拡大の最中にあって、私は多年お世話になつた二人の師を見送ることになりました。これで、私を坐禅の道に導いてくださった後藤牧宗和尚、私に初めて公案の修行をさせてくださった目黒絶海老師、私に仏教を学ぶ基礎を教えてくださった松原泰道和尚、私を出家得度させてくださった小池心叟老師、初めて僧堂でご指導くださいました足立大進老師、皆ご遷化されました。もはや直接の叱声を賜ることができなくなりました。毎朝、仏間ににおいて、読経回向しながら、これからは我が身ひとつを慎んでゆかねばと言ひ聞かせていました。

不要不急の外出を控えるように、不要不急の催しは控えるようにとの一言で、私の予定ができなくなりました。毎朝、仏間において、読経回向しながら、これからは我が身ひとつを慎んでゆかねばと言ひ聞かせていました。

かつては、皆で集まつて祈ることができ、その祈ることによつて、大きな力を得られたものです。今は集まることができませんので、インターネット動画という新しい媒体を利用しながら、祈りの心を届け、加えて毎月この大切さを実感しました。

はすべて消えました。自分の行ってきたことは、不要不急であったのだと身に沁みました。外出の要が無くなりましたので、しばらくは、畑を耕していました。

しかし、ただ畑を耕して自分だけ満足していっては申し訳ない、医療従事者をはじめ行政の方や流通に携わる方や、多くの方々が一所懸命に働いてくださつているおかげだとしみじみ思い、このたびの感染症でお亡くなりになつた方のご冥福と、感染症の収束と、現場で働いてくださつている方々のご健康を祈ることの大切さを実感しました。

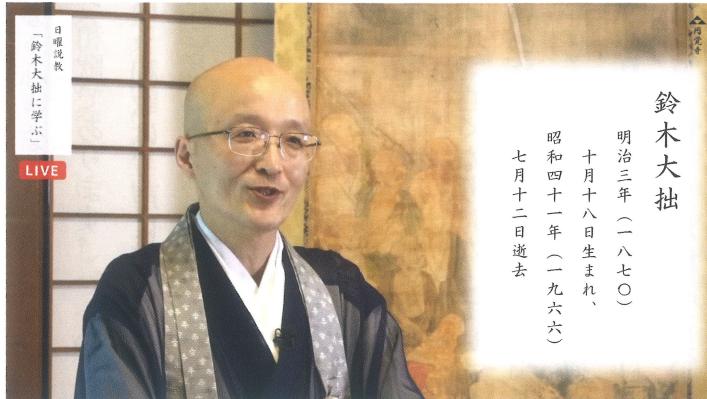
の法話などを配信するように努力しました。毎月京都の花園大学に出講して、月に一度の講義を担当していましたが、これもオンラインでの授業となりました。

坐禅会も当分の間開催を見込めなくなり、ついにオンライン坐禅会というものにも挑戦してみました。

これらの新しい試みは、既に円覚寺に来られていた方のみならず、まだ来たこともない方、私の話を聞いたこともない方、坐禅をしたこともない方も参加されたりして、新たなご縁を結ぶことができました。

どんな思いもかけない状況になつたとしても、そこで何ができるかを工夫することは無駄ではないと思いました。

これから先どうなるのか、不安にかられる時に、私がふと口づさむ和歌がございます。



七月十二日 日曜説教のYouTubeライブ配信



鈴木大拙

明治三年（一八七〇）

十月十八日生まれ、

昭和四十一年（一九六六）

七月十二日逝去

岩もあり 木の根もあれど さらさらと  
たださらさらと 水の流るる

という和歌であります。

こういう和歌は、声に出して読むだけで、いろいろなことがあつても頑張つてゆこう、乗り越えてゆこうという気になるものです。

この和歌を作られたのは、甲斐和里子さん

という方です。慶應四年（一八六八）にお生まれになつて、昭和三十七年（一九六二）に、九十五才でお亡くなりになつています。

広島県の浄土真宗のお寺にお生まれになり、京都女子大学の前身である顕道女学院の創始者であります。明治の初期に日本で各地にミッションスクールが創設されました。佛教精神に根ざした女学校が必要と思い、生涯を女子教育に捧げられた方でした。

また、こんな和歌もあります。

泣きながら 御戸を開けば 御仏は

ただうち笑みて われを見そなはす

これには、こういう思いを綴られていました。

「オオ、エライ事が出来たのう、可哀想につらかろうが、わしが始終いふ通り娑婆じやからぬう、しかたがない。まあしばらくの間は辛抱せいや」と仰せられるやうに感ぜられ、ジッと御念佛もうして居るうち悪寒を覚えるほどの苦しさも、丁度朝日にてらされる氷のやうに少しづつ解けて行き、いつとなく心もなごやかになりました……」  
といふのです。どんなに辛いことがあつても、仏様が見守つてくださると思うと心が

明治・大正・昭和と激動の時代を生き抜かれた方ですから、人知れぬ苦労もたくさんあつたのだろうと思います。

こんな和歌がありました。

み仮の 御厨子みづしの うちぞ  
人知れぬ 我が悲しさの  
捨てどころなる

悲しい思いを、人には言えないような悲しみを、み仮さまのお厨子のうちに、捨てるようにしてお念佛されていました。そしてこのように述懐をされていました。

「たへられぬやうな時は御戸を開き、つげぐちがはりに御念佛して居ますと、やがて心がラクになり、わが受持ちの仕事に従事することができますものです。」

安らかになるのです。

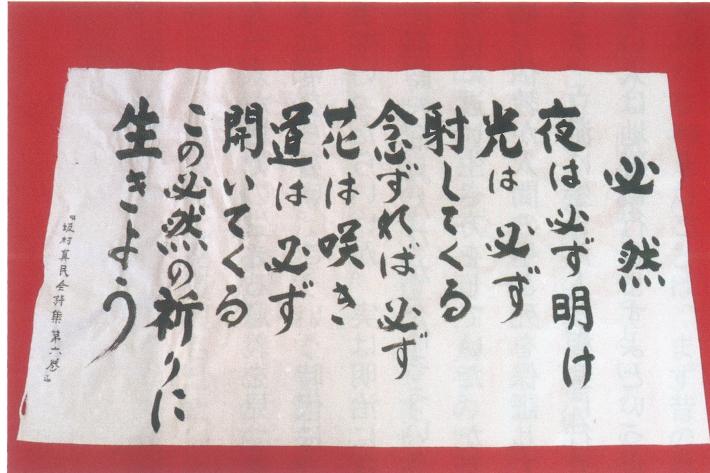
お釈迦さまは、この世に生きることは苦

であると仰せになつています。そしてこの世は、耐え忍ぶ処だと説いてくださっています。

思えば人類は幾たびもの感染症を乗り越えてきました。

かつて一九四〇年代にペストが大流行しましたが、古くは十七世紀のヨーロッパでも流行したことがあります。ニュートンは、大学が閉鎖され、田舎で庭仕事をしていて、リンゴの実が木から落ちるのを見て万有引力の法則を発見したと言われています。

もつとも、この発見は、ずっと以前から温めていた着想を練り上げていたのがひらめいたのであって、暇になつて庭仕事をしていた



「必然」  
黄梅院山門下の掲示板 六月の詩

という和歌のように、柔軟に対応してまいりましょう。

岩もあり 木の根もあれど さらさらと  
たださらさらと 水の流るる

それまでは、

ら思ついたというわけではありません。  
またニュートンは、大学の教授をしながら  
も、大学のチャペルで毎日十時間も祈つてい  
たとも言われます。  
敬虔な祈りと、日々のためぬ努力が大き  
な功績に結びついたのでしょう。  
ペストの大流行の中で、カミュは『ペスト』  
という大作を書き残しています。知人の大竹  
稽先生が、このたび『60分でわかる カミュ  
の『ペスト』』(あさ出版)を上梓されて、私の  
ように根気の無い者でも読むことができるよ  
うになりました。

なぜ、こんな目にあうのか、答えない不  
条理の中では人は如何に生きるべきかが説かれ  
ています。

どうしようもない極限状態でも、その環境  
の奴隸になることなく、「人間であること」を

祈る心を大切にして、お互いに思いやる心  
を忘れないようにしたいものです。必ず、光  
は射してきます。

(『坂村真民全詩集第六卷』より)

夜は必ず明け光は必ず射してくる  
念すれば必ず花は咲き道は必ず開いてくる  
この必然の祈りに生きよう

いましばらく、このような状況が続くかに  
思われます。

大切にして、「人間の優しさ」をたもち続け、  
一緒に苦しむ共感によって、心の平安を得る  
というのです。